

# 図書館だより

2021年

8月号

編集・発行  
指定管理者  
図書館流通センター  
出水営業所



先日、第七四回カンヌ国際映画祭・ある視点部門のオープニング作品に選ばれた『ONODA』（邦題）、『ONODA 一万夜を越えて』（邦題）が十月八日から全国公開されるとの報に接した。映画は旧日本陸軍少尉の小野田寛郎を描いたもので、同映画祭で上映され、熱烈なスタンディングオベーションに包まれたという。小野田さんは、終戦後も終戦を知らずに二十九年間、フィリピンの密林で従軍し続けていた人間。一九六四年に開催された東京オリンピックのジャングルで拾った新聞、トランジスタラジオを通じて、当時の様子を見聞きしていたという実録が残っている。東京二〇二〇オリンピック開催の年、同作は貴重なタイムミングでの日本公開を迎えることになった。

昭和四十九年（一九七四）三月十一日、小野田寛郎なる人物がフィリピンから日本航空の特別機で羽田空港に到着した。小野田寛郎とは太平洋戦争の終戦にもかかわらず、終戦を過ぎて任務解除の命令が届かなかったため、フィリピンのルバング島で密林に籠り、情報収集や諜報活動を行っていた人物である。今から四十七年前の出来事である。このニュースは、日本列島を席巻したテレビ各局は午後四時頃から一斉に特別番組を編成し放映した。視聴率は45.4パーセントを記録するなど大ニュースとなり、外国においてもこの残留日本兵ニュースを大きく取り扱った。小野田は、戦後から二十九年間、食料等物資の補給を受けることなく、自力で軍務を続けた人である。小野田にとつて終戦となる手続きは、当時の上官からの任務解除・帰国命令であった。この命令を下した人物は出水市出身の谷口義美である。

谷口は、出水市出身。旧制出水中学校（現出水高校）の四回生である。太平洋戦争では陸軍少佐として軍務に就き、小野田の上官であった。谷口は日本政府の依頼を受け、小野田の救出作戦に帯同するのである。谷口は、この救出行動について、同年十一月十五日発行の『出水文化』第三二号に「小野田元少尉ここに復員すその救出行動の概要」と題して事実関係をつづさに記した。以下、その記事の概要である。

（元）出水市立図書館長 田島 英樹

尚武集団（第十四方面軍であり、いわゆるフィリピン方面軍である）には、特務機関というものがなかったので、それに当たるものとして、方面軍参謀部に別班が設けられた。昭和十九年十二月、中野学校を卒業してきたものに、特別任務を与えて次のように配置された。

コレヒドール島 1名（生死不明）  
アバタン島 1名（帰還）  
ミンドロ島 4名（3名戦死）  
ルバング島 1名

小野田少尉は、ルバング島に単身赴任であった。

谷口は、特別任務者を掌握し派遣するまで、つまりマニラに共にいたのは、僅か数日間であった。ルバング島では、昭和二十年三月、米比軍が上陸掃蕩作戦を行い、多数の戦死者が出た。終戦後、生存者に対する救出作戦は同二十一年まで続けられ、四十人が山を下り、残ったのは小野田少尉、島田伍長、赤津・小塚一等兵の四人であった。小野田少尉の生存が確認されたのは、同二十五年七月、赤津一等兵が投降してきたときである。このとき、谷口をはじめ中野学校の同期生は救出を考えたが、まだ占領下。実行に困難があり、平和回復後も、しばらくは比国側から受け入れられなかったほか、その悲願を絶えず持ちながら、お互いの生活上のこともあり出来なかった。

同二十九年四月、島田伍長が射殺された。残りは小野田と小塚の二人。同四十七年十月十九日、小野田は小塚とともに比国警察隊と交戦したことで小野田の生存が確認された。厚生省から調査団（第一次）が直ちに派遣され、谷口も参加し、山下奉文大将の終戦命令と、谷口の署名入りの勧告文などを島内に散布した。同四十八年二月十五日から四月二十日ごろまで百名ほどの政府派遣の捜索団（第二次）が編成され、中野学校関係者、中学校同窓生なども参加し、後には、小野田の父君、兄の敏郎さんも加わった。

昭和四十九年二月二十七日の昼過ぎ、柏井（厚生省援護局審査課長・政府派遣団長）から谷口に電話が入った。「直ぐ、忍びで上京してきてほしい。六時の飛行機でどうですか？ とりあえず、私費で……」と。谷口は、鈴木青年の会談で、「上官の谷口少佐に」という小野田少尉の希望も知っていたので、話の内容は直ぐ了解したが、「準備の都合もあり、今日中は無理です」と返事して、翌日の飛行機で上京した。谷口は直ちに、厚生省の柏井を訪問。小野田少尉に対する命令文の起案に取り掛かった。前回のとき、平仮名で書いた投降勧告文は小野田に疑惑を与えたという鈴木報告があったので、完全に旧軍式によることにした。

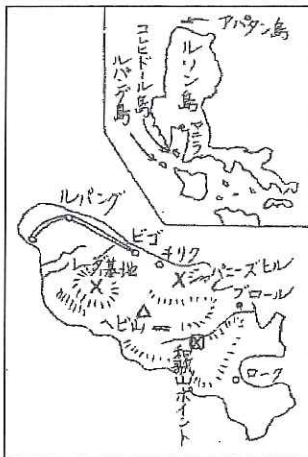
しかし、この作業は何しろ戦後三十年も経っているので、本科で戦術問題の答案を書くような気持ちであった。

翌三月一日、谷口や柏井らはマニラに飛んだ。柏井はフィリピン軍当局や鈴木青年に会い、委細を承知。救出企図は秘匿。此為、軍当局は、ルバング島に対し厳重な管制を行い、飛行機や船はもちろん、旅行者の渡航も禁止したほか、現地住民の入山もきびしく制限した。フィリピン政府・軍当局も「今度こそ成功させたい」と熱願したのである。

マニラ入りして二日目、三月二日は、内地から報道関係者が百人近くも来て大使館は大変な賑やかさになった。谷口らがマニラに来て第一に着手したことは、小野田少尉に対する命令文で、書き残してあった「下達法」である。いつ、どこでを明示しなければならぬからである。とにかく、苦心惨憺して出来上がった谷口の命令書と山下大将の終戦の命令書をガリ版刷りにし、それと、先に鈴木青年が、小野田少尉を撮った写真(一人ならんだのと、少尉が銃を抱き左腕の傷跡を示しながら座ったもの)二枚に、鈴木青年の小野田少尉に対する直接の呼びかけの言葉の計五点を、ワンセットにして、ビンール袋に入れた。

四日、空軍機で派遣団六人、ルバング島に渡る。準備したビンール袋を島内二十五カ所の連絡用ポストに比島軍下士官配布。後ほど、小野田少尉は、そのうち、六カ所ぐらいのものを見ていたと言っている。五日、谷口と鈴木青年だけでワカヤマポイントに至り、天幕を張る。ルバング島には、五キロ手前のブロール町に厚生省職員の間上氏が常駐、柏井団長と小野田少尉の兄敏郎さんは、このとき、西方高地のリーダーサイドに待機していた。

以下、次号に続く。



『出水文化』32号

## 【8月の予定】



15日(日)午前

「図書館を使った調べる学習コンクール」作り方講座(第2回)

場所:中央図書館 研修室

※ 31日まで作品を随時受け付けております。  
「私もコンクールに作品を出したい!」と思っている  
小・中学生の皆さんの作品をお待ちしております。



3館合同企画

「えほん DE オリンピック」開催中!

各館で世界の国々の絵本を展示・貸出しております。また、8月31日まで、子どもさん向けに世界の国々についてのクイズもあります。是非ご参加ください。



**8/1現在、出水市立図書館は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、お座席を半減して開館しています。又、読み聞かせ会等の行事も見合わせています。ご理解とご協力をお願いします。**

中央図書館 電話0996-63-2105

今月の休館日は 16日(定期)

今月の休館日は?

高尾野図書館 電話0996-82-5452

” 20日(定期)

野田図書館 電話0996-84-3100

” 20日(定期)

メールアドレス izumilibrary@iaa.itkeeper.ne.jp

<https://www.izumi-library.com>